



オーストラリア

派遣期間 2017年4月～2020年3月

パース日本人学校 実践報告

～地元小学校との交流からみた音楽教育～

芽室町立芽室西小学校

教諭 畑中 美佳

1 オーストラリアについて

広大な土地を持つオーストラリア【約 769 万 2024k m² (日本の約 20 倍)】は、オセアニアに位置し、オーストラリア大陸本土・タスマニア島及び多数の小島から成る連邦立憲君主制国家である。

イギリス連邦加盟国であり、英連邦王国の一国となっている。総面積は世界第6位の広大な土地を持つ。私自身が勤めていたオーストラリア4番目の都市パースから東側の主要都市に行くまで飛行機で5時間以上かかり、生活していてもオーストラリアの広大さは実感できる。近隣諸国としては、北にパプアニューギニア・インドネシア・東ティモール、北東にソロモン諸島・バヌアツ、東はトンガ・ニューカレドニア・フィジー、南東 2,000km 先にニュージーランドがある。オーストラリア本国が広大なため、周辺の諸国の方が近い都市もある。

多民族国家で、民族構成としてはイギリス系、オーストラリアン、その他ヨーロッパ系、中国系、インド系が多く、その他(先住民アボリジニ5%含む)民族も多く住む土地となっている。また、オーストラリアの歴史的反省から先住民のアボリジニの文化を守る活動や権利を回復する活動が見られる。

宗教はプロテスタントが多く、次にカトリックが多い。また仏教、イスラム教、ヒンズー教など様々な宗教があり、学校も各宗教や国を中心とした学校がある。日本人学校もその一つとして認識されている。

私が勤務していたパースは、オーストラリア連邦の西オーストラリア州都で、同州最大の都市である。パースはオーストラリア国内でも他の主要都市からかなり離れた場所にあり、隣国のインドネシアの首都ジャカルタの方が、自国の首都キャンベラや主要都市シドニー、ブリズベンより近い。人口は約 206 万人(都市圏人口。パース市の人口は約 9000 人)。西オーストラリアを代表する大都市である。一日の寒暖の差が激しく、暑さと乾燥を持つ土地である。しかし、インド洋に面するフリーマントル港から吹く風のおかげでヨークまでは比較的過ごしやすい。ヨークから内陸に入ると、植物の大きさがあきらかに変わるほど暑さと乾燥が強くなる。

パースはオーストラリア大陸西部でヨーロッパ人が建設した最初の大規模な入植地である。安価な労働力を手に入れた農家や実業家の要求によって、パースを含む西オーストラリアは流刑植民地となった。水不足に悩まされていたため、刑務所では水路を確保する仕事を受刑者に与えた。砂漠に近い土壌で事故が多かった、今でも受刑者の掘った水路を通ることができるが、その大変さがうかがえる。

2 パース日本人学校の特徴

パース日本人学校は、日本文部科学省およびオーストラリア連邦政府および西オーストラリア州政府の認可を得た学校である。小学部と中学部の生徒が校舎を共有している。児童数は多くないが、主要教科は複式授業をもたずに取り組む学校である。学期は現地の公立学校にできるだけ合わせるように4学期制をとり、新派遣者の時期以外は長期休業も現地の公立学校に合わせた形でとっている。少人数の学校である



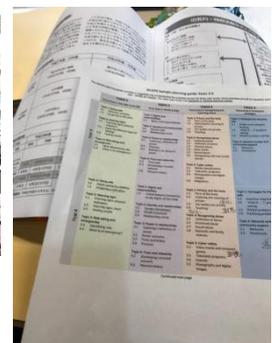
こととオーストラリアの法律に合わせ、児童の登下校は保護者の送り迎えで行われている（中学生は自分でバスによる通学をする生徒もいた）。2年前から現地の公立小学校 City Beach Primary school と同じ敷地に隣接されている。City Beach Primary school は現地の学校としては大きな学校ではないが、歴史ある公立学校である。また、オーストラリアの学校としては珍しく学校の周りをフェンスでおおわれておらず、地域とのコミュニケーションを大事にしている学校である。また、オーストラリアフットボールやサッカーグラウンド、バスケットコートを持ち、自然豊かな広大な土地にあるため、地域住民が散歩に歩く姿が時々見られる。



パース日本人学校は、3年前までは同じ地域のインターナショナルスクールの隣に10年近くあった。兵庫文化センターの2階と3階を間借りしていた小さな敷地の学校であった。地元校と同じように柵に覆われ、休日は柵に施錠がされていた。体育館もグラウンドもなく隣のインターナショナル校に借りて使用していた。場所の共有はあったが、インターナショナル校とは大きな交流がなく、日本人学校独自で学習を進めて行っていた。その前は、スカボロー小学校という違う地域の

地元小学校と同じ敷地に所在していた。このように短い年数で学校移転を余儀なくされる要因としては、パースに在住する児童・生徒の多くは現地の学校に通うため、日本人学校の規模が小さいことがあげられる。移転するたびに、その場所に合わせた行事などの取り組みが求められる。移転のため、変化を余儀なくされる反面、違う場所で新たな文化や人々と交流することや、そのときに合った学校の特徴を打ち出せる大きな利点もある。

国や州の認可が下りている学校であるため、オーストラリアや西オーストラリア州で定められている地元校と同じ講習や州の教育委員会からの訪問は必須である。また、教育課程のマッピングなどを行いながらオーストラリア・西オーストラリアにある学校に



ふさわしいかどうかのレジストレーションを受けなければならない。2年ごとのチェックを受けていく準備のため、通常業務とは別の仕事

もあった。その一つの地元教員と同じように受ける必須講習は、年度の初めに州の教育委員会の方が来られてチャイルドプロテクションの講習を教職員全員で受講する。また、アレルギー

やアナフィラキシーの学習は毎年受講しなくてはならない。これはオンラインで受講することができるが、受講する場合は、西オーストラリアの教員登録 (Teacher Registration Board of Western Australia) の自分のサイトに受講することを記す必要がある。オーストラリアは、アレルギーやアナフィラキシーショックに対して学校としての対応がしっかり求められているので、日本人学校の教職員も間違えずに対応できるよう、日本人のスクールナースに来ていただき追加でこのことに関する講義も受けるなど、国や州に認可を受けた学校として対応できるように取り組んでいた。また、中休みと昼休みは教員が外に立ち当番をして児童の休み時間の不測の事態に備える決まりがあり、日本人学校も同じように取り組んでいた。

隣接の City Beach Primary school の第二言語は日本語であり、日本人に対して好意的であり交流に意欲がある学校である。また、パースの中でも歴史ある高級住宅街に位置するため、児童も保護者も温厚で他文化を許容する余裕が感じられた。そのため、体育や音楽を中心に交流を行うことができた。体育では、朝マラソンと一緒に参加した。また、オーストラリアで人気スポーツを学ぶ授業に合同で参加することもできた。ただ、体育の授業の参加については、日本人学校と現地校のタイムテーブルの違いや自校だけではなく地域の学校と協力して授業を作っていくオーストラリアの教育の違い等もあり、担当教諭を中心に会議等で参加方法について何度も話し合われた。難しい部分も多かったが、保護者の希望も大きく今後も検討していく事項となっていくと思う。

また、体育を時々一緒に行っている関係で、地元校の運動会に日本人学校もジョイントしていた。オーストラリアの運動会は、日本の運動会と比べて陸上競技会にイメージが近い。また、2部構成となっており、1日目は高学年を中心とした陸上記録会で、三段跳びなども種目に入っていた。2日目は全学年で行われる。日本人学校が一緒になってからは、午前中にオーストラリアの競技を行い、午後に日本の競技が行われた。綱引きや玉入れ、大玉転がしなど、体育の授業でもルール確認を行いながら練習し本番に臨んだ。個人の能力を発揮して競技を行うオーストラリア競技に対して、チームで協力して取り組む競技の多い日本競技はオーストラリアの子どもたちからも好評で、競技に取り組む中で両校の児童・生徒の交流に役立っていたように感じた。

さらに、現在の校舎になってから2年目には、日本人の児童・生徒だけで披露していた日本の踊りのソーラン節を地元生徒で希望する子と合同で披露する機会を得ることができた。文化や授業形態の違いの中で行き違うこともあったが、両校とも前向きにとらえ取り組むことができた。また、オーストラリアでは地元校の運動会の後に、成績優秀者が地域大会に進むことになる。日本人学校の生徒も、地元校の一員として選抜された児童が参加することができただけでなく、会場校が City Beach Primary school ということもあり、インターシップ大会でも地域の学校の児童の前で披露することができた。

3月に行われる日本人祭りにも一緒に参加してくれる児童がいて、日本とオーストラリアの交流となったと思う。

両校の交流としては、それ以外にも、オーストラリアの「Anzac day」の集会や、オンライン化が進んでいるオーストラリアらしくオンラインマナーについて学習する授業、全校集会などで City Beach Primary school の授業に合同で参加することができた。また、City Beach Primary school のドネーションをするときに行うフリース Day に日本人学校も参加したり、日本語クラスの子どもたちが日本人学校の校長に日本語で話す練習に来たり、日本人学校

で取り組んでいた週に1回の昼清掃に City Beach Primary school の6年生が参加したり、日常的な交流を行うことができた。

オーストラリアでも、日本でいう一斉学力テストのような NAPLAN というテストを決められた学年で受ける必要があった(短年度しか住んでいない児童は免除される)。日本に将来帰国する児童にはさほど重要ではないが、オーストラリアに永住している児童には記録として残るため重要なテストとなる。現地でも家庭学習に取り組むことが多く、それに即した問題集などが販売されている。そのため、当初は英語科の教員が出題やすい英文やオーストラリア独自の表記を指導していたが、オーストラリアの学習課程の出題となり日本の教育課程と違う順序で出題されるため、大きな支障が出ないよう学校で共通のテキストを保護者に購入してもらい、昼学習等で全教員が指導に関わるように変わってきている。

パースは最も南極に近い地域のため、毎年南極観測船「しらせ」が燃料等の補給でパースを訪れる。その際に、乗務員の方々と交流を計ることができた。出港しているときには、なかなか乗船できない「しらせ」艦内に見学に行ける学校ということで、自慢の一つにもなっていた。

日本人学校は、休日に行われるイベントにも参加した。毎年行われるパースに多くいる外国人が参加するフードフェスティバルやパースに住む日本人主体で行う日本人祭りは、児童・生徒は任意の参加であったが、学校では担当がおり毎年の行事として参加するようになっていた。

また、派遣された日本人教諭はパースの日本人会に参加することが義務付けられており、墓清掃や海岸掃除、忘年会など各イベントに参加したが、他国に比べるとイベント自体は少なく、プライベートは個人の自由が多かったように思う。

3 現地の公立学校との音楽教育の交流

地元校 (City Beach Primary school) と、音楽や体育を中心に交流を行った。年度初めにお互いの担当教諭が打ち合わせを行い、合同で授業を行うだけでなく関連した行事も一緒に参加した。音楽科教諭である私は、2年間にわたり授業や行事などで交流と指導を行うことができた。この交流を通して、オーストラリア教育の特徴や良さとともに、日本の音楽教育の良さについて考えることができた。

① オーストラリア地元小学校との合同授業の取り組み方

パース日本人学校と地元校 (City Beach Primary school) の合同音楽活動が始まった初年度は、地元校音楽教諭と相談し、年度初めと年度終わりを外して交流を行うことにした。というのも、日本の年度は4月始まり3月終わりであるが、オーストラリアは2月始まり12月終わりであるからである。どちらも学校が落ち着く8月から11月の期間に8回程度、週1の合同授業を行った。

そして、3クラス(1・2年生→1・2年生クラス、3・4年生→3・4年生クラス、5年生～中学部→4・5年生クラス)で合同授業に取り組んだ。現地校の1時間60分授業に合わせるため、その曜日だけ時間割を変更して授業を行うことにした。また、City Beach Primary school は月に一度行われる全校集会で音楽発表を行っていたので、交流しているク

ラスの発表の月は合同で英語の曲と日本の曲と一曲ずつ発表することにした。

また、オーストラリア全土で取り組まれている Music Count in us に一緒に参加するように授業を組み取り組んだ。City Beach Primary school の音楽教諭の協力も大きく、初年度にしては児童・生徒同士の交流として得るものがあったように思う。日本でも教育課程で多く入ってきている作曲を含めた創作活動についてオーストラリアは進んでおり、リズムやメロディーを計画的に構築していく体験ができたことは日本人の児童・生徒にとっては良かった。さらに、オーストラリアの児童にとっては、日本の子どもたちの習った技能を習熟し生かすことや全体的に高い演奏技術は学ぶことがあったと思う。

しかし、いくつかの反省点もあった。オーストラリアは、技能教科の指導教諭の多くはその学校の授業がある日にだけ通勤し、1人の教員で複数校の指導を任せられる場合が多い。そのため、お互いの学校事情で変更が生じた場合も適宜報告し相談することができず、各方面の予定決定を遅らせてしまうことがあった。オーストラリアと日本の学校形態の違いによってなかなか話が伝わらないときもあったが、互い慣れてくることによって理解が深まるように思った。また、60分全部の時間を合同で行うとお互いのカリキュラムに支障が出てきてしまうこともわかった。

翌年度は、前年度の反省を踏まえ、期間や回数は大きく変えず交流する時間を60分から半分の20分から30分とした。理由としては、先に書いたように、お互いの国の学年のカリキュラムの進行を妨げることがないように配慮したためである。また、クラスも2クラス

(1・2年生→1・2年生クラス、3年生～中学部年生→4・5年生クラス)とした。両校の子どもたちが交流の目標が見えやすいように、イベントに参加する曲(お互いの国の曲を歌う)を中心に練習を行う方向で授業を行い、イベントは前年度同様に City Beach Primary school の全校集会での音楽発表とオーストラリアで取り組まれている Music Count in us に一緒に参加した。日本の保護者にとっては、英語の曲を現地の子どもたちと一緒に歌うことができるようになっていく成長が嬉しいようで、家庭でも Youtube を使い練習してくれた。また、現地校の保護者に、日本語の曲を歌っている様子を第二言語についての理解と捉えてもらい喜んでもらった。

② オーストラリア教育の特徴と良さオーストラリア教育の良さ

オーストラリア教育の良さ、どの技能レベルの児童も楽しく授業に参加できる工夫がされている点である。合同授業ではもちろん、現地校の音楽教諭の紹介で毎年行われるパース市内の地元音楽教諭の講習会に2年間参加した講習会の際に感じた。

その1つとしては、楽器の工夫があげられる。音楽を演奏するとき間違いが目立たないようにするとともに、音が出しやすいようにという工夫が随所にされていると思えた。

例えば、オーストラリアの小学校で鍵盤楽器として多く使用されている木琴は、鍵盤一つ一つが取り外し可能な作りとなっていて、児童のレベルによって曲に必要な音だけを楽器本体にはめて演奏することができる。また、音名が最初から一枚一枚に書かれているため、鍵盤の位置配列をまだ覚えていない児童



も無理なく演奏に参加することができる。鍵盤の位置を覚えることに時間をとられないため、全体でリズムやハーモニーの学習を行いやすいと思えた。

また、「Boomwhackers」と呼ばれる楽器も、オーストラリアの小学校ではよく使われる楽器である。プラスチックでできた筒状の楽器で、軽くて打ち付けると音が鳴る楽器である、打ち方や打つ場所も自分で工夫して音を出すことができる。ミュージックベルのように、リズム楽器として、または音階を伴う曲にも使用することができるため、便利な楽器であった。ミュージックベルよりも音のボリュームが大きくなり、一つの教室で違う曲を練習することも可能である。



実際、「Boomwhackers」を借りて日本人学校の音楽の授業で取り組んでみた。異学年のクラスでの取り組みであるが、どのレベルの子も楽しそうに活動していた様子が印象的であった。いつもグループの練習では意見を言わない児童も、「音を重ねてみよう。」「リズムを変化させてみよう。」などの意見を積極的に言っていた。また、音の重なりも、知識から出た意見を全員が音を出しながら確認して和音を作ることができていた。

打楽器では、マラカスや拍子木などが低学年の児童にも鳴らしやすい大きさになっていた。長い筒状ゴム製の棒を振り回すことによって風の音を表現する楽器などもあり、音楽の創作表現をするときによく使われるようだ。簡単に音が出ることと動作が大きいいため、オーストラリアの子どもたちにも活動のときに人気がある楽器だということだ。



指導の面では、構成のパート分けを「ストロベリー」「レモン」などのフルーツのカードで表し、リズムや演奏する楽器を指導する方法を教えていた。

日本でも似た方法をとって指導する教諭もいるが、音楽教諭の講習で行っていることに驚いた。日本とも共通である点もあった。授業の初めに、歌やリズム遊びで子供たちの意欲を高めるウォーミングアップだ。講習でも、すぐに実践で使えるとあって、どの教諭も真剣に学んでいた。



また、小学校のうちから選択音楽があり、技能や意欲が認められた児童は高学年になると通常の音楽授業とは別に管楽器やギターの授業を受けることができる。しかし、保護者に使用する楽器を購入してもらうことや、学校によっては他の学校にその授業を受けるために保護者が送り迎えをしなければならないこと、他の児童が別の授業を受けているときにその児童だけがぬけて指導を受けることなど、オーストラリアだからできる教育であるともいえそうだ。



オーストラリアで指導を行って改めて感じた日本の音楽教育の良さとして、指導要領に従った教科書によって、学年ごとに段階を追って系統的に知識や技術が身につくということがあげられる。

また、教科書というわかりやすいテキストにより、音楽の専門家の指導がなくとも子供たちに一定のレベルの技術を身につけさせることができる。特に楽譜を読むときに使用する音楽用語の知識や鍵盤配置の認識、鍵盤ハーモニカやリコーダーなどで学ぶ鍵盤楽器・管楽器の基礎技術は、他国でも十分通じる能力が身につけていると思う。

実際、オーストラリアの音楽授業を日本人学校の子供たちが受けたときも、日本の教育で学んだ素地があるため、参加することは難しくなかった。例えば、音符の読み方が違う（日本では「ドレミ…」を使用、オーストラリアの学校では「CDE…」を使用）が使用する楽器の音の配置は同じであるため、合同授業の前に予習をすることで現地教諭の歌声に合わせて楽器を演奏することができていた。これは、日本の教育で早くから楽譜を使い五線譜に書かれた音程を理解できるように指導を行っていることの成果である。日本の子どもたちは、すぐに五線譜の音が読めなくても、「今演奏している音よりも上に書かれている音は高い音で下に書かれている音は低い音だ」ということを理解し演奏につなげることができていた。

オーストラリアで勤務することができたことにより、日本の音楽教育の良さとグローバル時代であるからこそその音楽教育の重要性を再確認することができた。また、勤務2年目から現地校と音楽授業を共に学ぶ機会に恵まれたことから、オーストラリアの音楽教育からも今後の日本の音楽教育での工夫を考えることができた。

4 暮らしを多面的に見てみよう！

① オーストラリアで教員として働くために

オーストラリアで教員として働くためには、西オーストラリアの教員登録（Teacher Registration Board of Western Australia）をしなければいけない。登録が受け付けられると、日本の自動車免許証のような証明証が発行される。この登録が、日本から来たばかりの人間には大変であった。かといって、遅らせると無免許で子供を指導することになってしまう。なので、日本人学校の教員として、赴任して最初にする仕事となる。また、年々厳しい審査になってきているため、前年度登録した際の情報と変わっていることもあり、混乱することもある。

概要だけ聞くとシンプルである。郵便局で記入用紙をもらい、必要書類と必要な証明書を持ち、もう一度郵便局で証明写真をとって登録料を支払えば完了である。当たり前であるが、提出書類の記入事項はすべて英語である。また、日本人学校の理事長に教員としての証明書を記入してもらう。特に大変なのは、証明に関してである。いくつか証明書の選択があるが、私たちが準備できるものはパスポート、銀行キャッシュカード、オーストラリアの免許証などである。また、オーストラリアで使用する電話番号を記載しなければならない。パスポートはすでに発行されているが、銀行の口座開設と携帯電話の契約は赴任して最初に行う。特に銀行のキャッシュカードは重要である。なぜかという、オーストラリアは通帳がないので、銀行を開設した後の証明は通帳ではなく銀行のキャッシュカードになる。申し込みをしてから2週間後ぐらいに自宅に郵送されてくる（普通郵便で！）。配達ミスや盗難など日本よりはリスクが大きいの、届くまでは緊張する。

次に運転免許証であるが、これにもパスポートと銀行のキャッシュカード、また、記載した住所に本当に住んでいることを証明するために公的機関や準じる機関から届いた自分宛の郵便物を持っていく必要がある。自動車免許証やキャッシュカードがないと TRB に登録できず、ちゃんとした機関から郵便物が来ないと自動車免許証を取りに行けず、早く取りにいけないと無免許で教えてしまう。また、パスは赴任した当初、営業時間がしっかりと決められているので、手続きにいく度にすでに赴任している他教員に仕事の負担がいつてしまうなど、ジレンマはあった。それでも、私と同じ時期に赴任した教員は3人であったことや、事務担当の現地職員が親切であったので心強かった。

② 住居

先の手続きにも必要なため、他の職種はともかく教員は早くに自分の住所を決めておく必要がある。この新年度に赴任する教員の家を借りておくのがすでに赴任している教員の仕事であり、年度末の中で最も大変な仕事の一つであると思う。なぜかという、ワーキングホリデーや留学生の多いオーストラリアでも、同僚とはいえ赤の他人が家を借りるということは難しいからである。家を借りる手順としては、まず借りたい家の下見（インスペクション）に行く（インスペクションの日取りはサイトや不動産のホームページを見る）。インスペクションで、良いと思ったら書類を提出する。これは、早い者勝ちになるので必要事項は先にいる人間でできるが、サイン等本人のものが必要なため、日本の新派遣者との迅速なやり取りが必要である。とはいっても、日本で出国準備をしている忙しい新派遣者が早く取り組んでもそれなりの時間がかかるし、時間がかかると別の物件になってしまうので、また新たに書き直してもらう必要がある。他の職種で赴任されている方とそこが違うかもしれない。

住んでいる中でも、日本と違うところがいくつかあった。家やアパートの「家具付き」「家具なし」の割合は日本と逆で、多くは家具付きの家を借りることが多い。多くの家は、借りたあと不動産会社から配布される家や家具の状態をチェックし、不動産会社に送付する。元々不具合があるものについては、このときに連絡しないと退去のときに修繕費として請求されてしまうからである。また、3ヶ月に1回インスペクションという点検がある。不動産会社の担当者が来て、住人が住居契約を守って使用できているかどうか点検し、写真などを撮っていく。また、退去する1ヶ月前には、住んでいる間にも次借りる人のための下見のインスペクションが

ある。インスペクションの日時は直前に言われるので、1ヶ月前からはいつ連絡が来てもよい状態にしておかなくてはならない。(オーストラリアの不動産担当者は「片付けなくてもいいよ。気にしないよ」とは言ってくれるが)。

また、退去するときはクリーニングなど業者を入れるように指定される場合がある。カーペットのみのときもあればクリーニング全体を業者にさせるように指定される場合もあるので、退去時に不動産会社に確認する必要がある。日本のように連絡がない場合、連絡をしない業者が悪いのではなく確認しなかった本人の責任になるので、業者と事前に連絡を取っておくことと、行き違いになったときに証明できるようにメール連絡を主とし、そのメールを保存しておく必要があった。日本人ではあまり聞かないが、住居の関係は裁判までいくこともあると聞いた。

③ 交通手段

北海道と同じく断然自家用車が交通手段として多い。日本と同じく右ハンドルで交通ルールもさほど変わらないオーストラリアは、日本人としては運転しやすい国であると思う。フリーウェイが多く、その運転だけは慣れる必要があるが、オーストラリア人は運転中穏やかな人が多く、あおられることもないし走路を間違えても心よく待って相手を入れる人が多いので、楽に運転していける。交通法規は意外に厳しく、制限速度が60kmから80kmなど速い代わりに2km以上のオーバーで速度違反になってしまう。ルールにゆとりはあるが、ルール違反には罰金がとられ、高額である。また、街中の駐車料金が日本以上に高く、広い路上に路駐できるよう看板がかかっていたりする(無料のところもあるが、利便性が高いところは有料になる)。



電車は日本とほぼ乗り方は変わらないが、バスは市内循環バス以外、停留所が近くなったら自分で判断してブザーを鳴らさなくてはならない。バス内の放送がかからないバスが多いので、その場所に着くまでアプリの地図を起動しておいて停留所が近くなったらブザーを押すなど工夫した。乗車するときも、自分が乗りたいバスが通るときに道路に向けて手を上げないと、停留所で止まってもらえない。郊外に行くバスは出ているが、特定のバス停以外で使用する人が少ないのか、降りた後に歩道どころか、草むらを歩いて移動しなければならないこともある。郊外に出るときは車を使う必要性を感じた。



公共機関の乗り物は、バス・電車どちらの乗り物もスロープが降りたり、車いす用に椅子が配置されていない場所があったりなど、バリアフリーが進んでいるように感じた。また、老若男女問わず、ベビーカーや車いすや松葉杖の人などに対して配慮する様子が見られた。

タクシーも日本同様多いが、パースは乗り場が多くないこととインターネットの事前予約以外に時間がかかることや高額なため、旅行等で荷物が多い場合を除いてはUberやOlaなど

を活用する人が多い。

④ 自然

広大な土地を持つオーストラリアは、自然が豊かであり自然を愛している印象を感じた。公園の動植物を勝手に抜いたり、とったりすることは禁止されている。

また、よく聞くワイルドフラワーは野草のことであり、



人間が多く関与しない中での自然もとても大事にしている。パースで有名な公園のキングスパークはワイルド



フラワーが多く生えている場所である。花を摘むことを禁止することはもちろん、花の近くの地面にも入らないように指定されている。多くの人が利用する公園であるが、自然に対するマナーを守らない人は見たことがなか

った。乾燥地帯が多いオーストラリアは、頻繁にブッシュファイヤが起こるが、その周りで変化を遂げている草木なども生態を観察しながらあるがままに受け入れている。野生のカンガルーも多く、郊外を多く走る車は、前にカンガルーよけのガードをつけている車も見かける。北海道同様、交通の看板に、その地域によく出没する動物の看板が掲げられ、車の運転を注意する指示が出されている。自然と共存しているところはすばらしいと感じた。

5 おわりに

日本人学校に3年間派遣していただいたおかげで、色々な経験をする事ができた。自分自身が希望動機の一つとして、旅行などの短期で滞在では気づけない日常生活の違いを体験することを子どもたちに話したいという思いがあり、その実現をさせていただいたことは大変ありがたかった。この経験を子どもたちに伝えていきたいと思っている。

また、色々な人種や国から来ている人が多いオーストラリアで生活してみて、改めてコミュニケーション能力、自己表現と自国のアイデンティティの重要性を感じた。会話できることはもちろん大事だが、自分の使えるツールを使い、いかに相手に自分の考えをつたえるのか、相手を理解すると同時に相手の立場を理解し、適度な距離感を持つことができるか、自分という人間に興味を持ってもらったときに、相手に伝える自国についてはもちろん個性を持っているか、子どもたちを指導する上で生かしていきたい。